薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・

２０２１年
７月５日
第１１７号

ヒヨス（ナス科）

第二圃場で灰黄色の花がチラホラと咲き始めています。ヨーロッパ原産で、広く栽培されている１～２年草です。葉、種子にヒヨスチアミン、スポコラミンなどが含まれ、 ヨーロッパで葉を鎮痛を目的に使用していましたが、毒性が強く、民間での利用は不可です。ヒヨスは、漢名で「莨菪」（ろうとう）と呼びますが（ただし現代中国語では天仙子と呼ぶほうが一般的）、日本語での「莨菪」は同じナス科に属するハシリドコロを指し、これが日本薬局方収載の生薬、ロートコンの基原植物となっています（ちなみにハシリドコロの中国語名は「日本莨宕」）。ヒヨスチアミンは、ヒヨス、ハシリドコロ、ベラドンナ、チョウセンアサガオのナス科植物に分布し、少量なら胃腸の痙攣を抑制し、鎮痛作用を示しますが、大量では向精神作用のために幻覚、異常興奮を起こします。

タイマツバナ（シソ科）

温室前の鉢でボリュームのある赤い花が見られます。図鑑ではビーバーム（bee balm）とかモナルダ（*Monarda*）の名称で紹介されることもありますが、ビーバームの名は花が甘い香りと蜜をそなえていて養蜂の際の蜜源として利用することに由来し、モナルダの名はヤグルマハッカ属の属名です。また、葉の匂いがミカン科のベルガモットに似ている（柑橘類の香り）ことからベルガモットまたはレッドベルガモットと呼ばれることもありますが、こちらはシソ科です。葉にチモールやカルバクロールなどからなる精油を含み、乾燥してポプリとしたり、ヨーロッパで芳香性健胃薬、駆風薬として使用されていました。また、北アメリカの先住民が、葉や花をハーブティーとしても使用していたそうです。